

Yumiko Tanikawa

施設概要

福井県立恐竜博物館

館長 谷川 由美子
所在地 福井県勝山市村岡町寺尾51-11 (かつやま恐竜の森内)
開館 2000年7月14日
資料点数 約4万1千点
施設面積 敷地面積 約38,000㎡
延床面積 23,600㎡ (本館16,400㎡、新館7,200㎡)
常設展示室 4,500㎡
特別展示室 900㎡
入館者数 84万6,433人 (2023年度)

たにかわ・ゆみこ プロフィール

1969年3月 福井県生まれ
1991年3月 筑波大学第1学群社会学類 卒業
1991年4月 福井県庁 入庁
2017年4月 産業労働部企業誘致課 参事 (企業立地)
2020年4月 産業労働部企業誘致課長
2022年4月 福井県立恐竜博物館 副館長
2023年5月 福井県立恐竜博物館 館長

世界に誇るキラコンテンツ

～眠りから覚めた恐竜が福井を盛り上げる

福井県立恐竜博物館 館長

谷川 由美子氏

聞き手 理事長 沼田 雅博

はじめに

福井県を代表する観光文化施設「福井県立恐竜博物館」。太古のロマンと不思議を体験できる、その本物志向が人々を惹きつけ、2024年度には来場者数が年間100万人を突破するなど、「恐竜王国福井」のブランドを確立しています。当館の歴史や魅力アップに向けた取り組みなどについて、谷川館長からお話を伺いました。

(沼田 雅博・ぬまだ まさひろ)

——施設の沿革や概要などをご紹介ください。

福井県が運営する県立の博物館です。当館は社会教育施設であって、お金を儲けることが目的ではなく、貴重な資料を収集・研究し、その成果を社会へ還元することを目指しています。最近では観光施設という面がクローズアップされていますが、本質である調査研究と合わせて両方をうまく運営したいと思っています。

1982年に福井県勝山市北谷の杉山川流域で1億2千万年前（中生代前期白亜紀）のワニ類の

全身骨格化石を発見、その後も小型肉食恐竜の歯化石が発掘され、1989年から本格的な発掘調査が始まりました。本格調査から数えると35年続いている事業で、これまでにフクイラプトル^{※1}、フクイサウルス^{※2}といった新種の恐竜化石6種と鳥類化石1種の発見^{※3}など、大きな成果を上げています。

——国内最大級の地質・古生物博物館として、世界三大恐竜博物館^{※4}の一つとも称されています。失礼ながら、「恐竜の化石が飾ってある」、「子どもが見学に行く」といったイメージもあると思いますが、国内外から多くの研究者が集う調査研究の場所だとお聞きしました。

著名な博物館と並び称されるのは本当にありがたいですね。研究員は16名おりますが、恐竜を専門としない、貝や植物、カメの専門家もいます。1億2千万年前の勝山が、どんな場所で、どんな生き物がいて、どんな植生があって、どう命が育まれたか、総合的に研究できるのが強みです。博

※1 日本国内で発見された恐竜のなかで初めて新種として名前が付けられた

※2 別名フクイリュウ、2003年に正式に学名をつけられた日本で最初に全身骨格が復元された草食恐竜

※3 この他は、フクイティタン、コシサウルス、フクイペナートル、ティラノミムス、フクイテリクス（鳥類）

※4 カナダのロイヤル・ティレル古生物学博物館、中国四川省の自贡（じこう）恐竜博物館

博物館は「展示して観覧するだけ」といったイメージもあるでしょうが、当館から車で15分位の場所に研究フィールドがあり、いわゆる都市型の博物館とは一線を画しています。そこでは現在も発掘調査を行っており、その研究内容を反映させていくことで、過去の発見を展示しているだけではない、今もなお「生きている」博物館なのです。

——2024年7月に増築、リニューアルされましたが、館長おすすめの見どころなどをご紹介します。

新館1階に高さ9m×幅16mの大型スクリーン3面で構成された「3面ダイノシアター」を設置し、恐竜の動きや、その周辺の環境をリアルに再現しています。

また、当館では4月から11月頃まで、「野外恐

化石研究体験

■化石発掘プラス

ハンマーやタガネなどの専用ツールを使って、実際に研究で使われている岩石から化石を見つけ出し、化石を見分けていく。



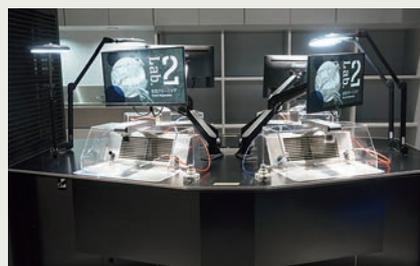
■T.rex頭骨復元

原寸大のティラノサウルスの頭骨を組み立てる。解剖学的に観察し、これはどこの骨かを考えながら組み上げて、立体ジグソーパズルのように復元プロセスを体験する。



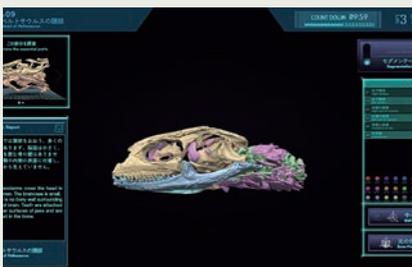
■化石クリーニング

実際に使っている本物の道具（歯医者さんが使う機械に似た専用ツール）で石を削り、化石のレプリカを取り出して、化石クリーニングの臨場感を体感する。



■CT化石観察

これまでは割ってみないと分からなかった岩石の中や化石の中を、CTスキャンしたデータを画面上で解析して、割らずに内部を観察し、化石を壊さずにその中身を調べる。



提供：福井県立恐竜博物館

竜博物館」というツアー形式の化石発掘体験ができます。専用バスで発掘現場近くへ行き、研究員の解説を直接聞いて、実際の発掘現場から運んできた石を叩いて発掘を体験します。とても人気がありますが、冬場は積雪のため営業できないので、リニューアルした新館では「化石研究体験」を始めました。化石の研究は発掘して終わりではなく、その後に行う研究員の作業や研究を実際に体験できる4つの研究体験メニュー（前頁）を用意しましたので、オールシーズンで体感・体験して、楽しんでいただきたいと思います。

——北陸新幹線の延伸開業にあわせて、福井県内のどこへ行っても恐竜がいるようになりました。恐竜の研究と観光とが結び付く形で、ブランド化が一段と進んだ印象があります。

恐竜博物館が「福井を訪ねる」動機づけになるなら大変嬉しいことです。

「恐竜王国福井」というブランディングは、行政としてもかれこれ何十年も旗振り役となって県内外へ宣伝してきました。北陸新幹線の延伸をきっかけに、福井県民をはじめ本当に多くの方々に受け入れていただけたと実感しています。

——まだ来館者が多くなかった頃、例えば小学校の遠足を誘致するなど、博物館だけでなく県庁の方も動いておられた記憶があります。

教育旅行は非常に重要視しているターゲットで、意外にもコロナの影響で花開きました。遠くに行けなくなった中学校や高校の修学旅行が、近



提供：福井県立恐竜博物館

場にある教育施設として当館を選んでくれたのです。加えて、それをきっかけに恐竜博物館を知ってもらえたという効果もあったと思います。最近では皆さん休暇が取りやすくなったようで、土日と連続して休める金曜日や月曜日はお子さま連れのファミリーが多く、週半ばは大人の方やツアーで来られるご夫婦も多いですね。

——私も20年ぐらい前に息子と一緒に来ましたが、ちょうどその世代が昔の記憶を辿って自分の子連れで来るタイミングになり、長いスパンでリピートしている面もありそうですね。

恐竜というのは不思議なコンテンツで、リアルサイエンスの一つの分野でありながら、大衆文化におけるコンテンツとしても成立しています。これは日本特有なのですが、アニメ漫画にも恐竜が登場してくるような文化が根付いているので、サイエンスへの興味の有無に関わらず、幅広い世代に対して訴求できます。博物館としても、その間口の広さに対応できるイベントを企画し、楽しんでもらえるように努めてきたことが実を結んだようです。おっしゃるとおり、子どものときにジュラシックパークの映画を観て、恐竜が好きになった人も多いでしょう。その子どもたちが今は大人になり、相変わらず恐竜が好きという、本当に不思議な文化の中で恐竜は生き続けています。

——2024年の夏休みも大変な賑わいだったようですが、最近の混み具合はいかがですか。

コロナ禍以前は大変な渋滞が発生し、お客さま



提供：福井県立恐竜博物館



Yumiko Tanikawa

が観覧券を購入するために1時間も2時間も列をつくる状況になって、満足度を下げていましたので、2023年からWebでの事前チケット購入制を開始し、1日あたりの入館者数に上限を設定しました。GWやお盆、9月の連休は、入館者が上限に達して大変混雑しましたが、以前なら入館に1～2時間かかっていた待ち時間が15分程度になり、博物館から何kmも続いていた車の渋滞も最大約2km程度に緩和できました。

——Web導入で来館者の情報がデータ化され、マーケティングが可能になったことも一つの成果で、ターゲットの絞り込みやインバウンドへの対応など、今後の運営に活かすことができますね。

そうですね。来館者は関西・中京からが多く、それぞれ全体の3割程度でしたが、北陸新幹線の延伸で、関東からの来館者の比率が全体の16～17%から23%まで増加しました。関東が2割を超えてきたのは、開業に向けたさまざまなイベントで常に恐竜を使ってきたアナウンス効果もあると思います。

これまでは関東方面や新幹線沿線地域へのPRを強化してきましたが、次は大阪万博、そして中部縦貫自動車道の全線開通に向けて関西や中京方面への発信が必要かもしれません。おっしゃるとおり、われわれも限られた人員のなかで、効率的にターゲットへ訴求していく必要があります。従来はファミリー層をメインターゲットとしてきましたが、それ以外にも、知的好奇心の高い大人の

方のニーズが首都圏を中心に少なからずあることが分かってきています。東京から来ていただく場合、確実に1泊はされるでしょう。宿泊を伴うことで経済効果も格段に上がります。

私は平成3年度に福井県庁の職員になって、企業誘致や新幹線の用地買収を担当してきました。新幹線が敦賀までつながって、誘致したホテルが無事オープンして、仕事としては一つやり遂げた想いがあったところへ恐竜博物館の仕事をいただきました。それまで恐竜に触れる機会はなく、知識もほとんどなかったのですが、ここでは多くの新しいことが学べて、大人になってもいろいろな新しい経験ができることに喜びを感じています。「私と同じように世代に関わらず恐竜を知ってもらいたい」、そんな想いを人一倍強く持っています。

福井県はこれまでインバウンド観光客が少なく、当館でも外国からのお客さまは平日で50～60人程度と多くはなかったのですが、リニューアルを機に海外にもWebチケットの販売チャンネルを設けたことで少しずつ増えている状況です。

ほかにもいろいろと取り組んでいます。発見された恐竜をモデルにした福井県の公式恐竜ブランドキャラクター「Juratic」をご紹介します。可愛らしくて子どもたちに大人気で、いろいろなイベントにも登場して活躍してくれています。ちゃんとストーリーがあって、お腹が空いて行き倒れたところを、福井県の人から食べ物（越前がに、おろしそば、焼き鯖）をもらい、助けてもらったお礼に福井県を応援してくれています。以前、ライ



Juratic (左からラプト、サウタン、ティッチー)

ブのために福井に来たアイドルの方が、このぬいぐるみの写真をSNSに投稿してくれた際は、翌日に多くのファンの方が当館のショップに買いに来てくださり、あっという間に売り切れてしまいました。

——開業前、JR福井駅から離れているので、二次交通が課題だと思っていましたが、乗っている間も楽しめるXRバスなど、ほかの観光地でも参考にすべき取り組みがありますね。

ファミリー層が圧倒的で、マイカーやレンタカーで来られる方が多いとはいえ、本当に二次交通がネックとなっているならば、こんなにお客さまは増えていないはずですよ。恐竜バス、恐竜レンタカーなど、各事業者さんはそれぞれに工夫をされていますね。

——キャパ的には一杯に近い状態にも感じますが、さらに来館者は増えそうですね。

リニューアルと北陸新幹線の開業が重なって、コロナ前の一番多かった年と比べても、来館者数は1.6倍になっています。駐車場が足りなくなりつつあり、とくに繁忙期になると、これ以上の受け入れは難しくなるかもしれません。

当館の「常設展」の魅力には確信を持っていますが、現在3年振りに開催している「特別展」が好調なことも、過去最高を記録する要因になっています。来館者に尋ねてみると、「初めて来た」、「県外から来た」というお客さまも多く、この方々が再度来ていただくようになれば来館者はますます増えそうですね。

ちなみに、この「特別展」の開催が可能になったのも、われわれの調査研究があってこそです。海外の研究者とのコネクションが築かれ、多くの研究機関と提携できていることで、貴重な資料をお借りして、日本初公開となる質の高い資料が集められています。最近では、エンタメ的な要素で注目を浴びることが多いのですが、恐竜化石研究の拠点であることこそが大切なのです。

——福井県が恐竜をブランド化できたのは、長



Masahito Numada

年にわたる調査研究が根底にあるのですね。しかし、県の職員から館長に就任されて、目新しいことが多くて大変だったでしょう。

ほかの職員も一緒だと思いますが、特に恐竜の名前を覚えるのは大変でした。名前が長々としたカタカナですから。でも、学ぶ機会は大人になると減っていきます。子どもは自動的に学校で学習プログラムが与えられますが、大人は自分で探して、お金を払って教えてもらう必要があります。不意に知らない環境に放り込まれましたが、そこで自分の知識が増えていく、それも仕事として経験できることは、非常にありがたいと思っています。

——館長は福井県ご出身でしたね。都会で就職して、故郷に帰ってこない若者が多いのは北陸共通の悩みです。その原因も単に働く場所だけの問題ではないような気がしています。

遊びに行くなら都会でしょうけど、暮らすとなると福井が良いですね。私の場合、県庁ではさまざまな仕事に従事してきました。恐竜については馴染みがなかったのですが、今は知る喜びに満たされつつ仕事をしているので、本当に恵まれていると思っています。

先ほどもお話したとおり、県庁では長く企業誘致に携わってきました。その昔は誘致するといえば、雇用が多く生まれるという観点から製造業が中心でしたが、最近では、IT系のオフィス誘致にも力を入れており、IT系の若い人たちも地元福井

で働くことができるようになってきました。子どもたちに福井で暮らす魅力を改めて伝えていく必要があると感じています。

教育施設である博物館としては、学校向けに教育プログラムを提供していますが、子どもの頃から恐竜に触れることで子どもたちが地元の魅力に気付き、若者が地元に着定してくれたらうれしいですね。ちなみに、2025年4月に福井県立大学の恐竜学部が開設されます。国内初、オンリーワンの学部です。現在、当館の敷地内に学部棟を建設中で、博物館に大学が併設されるという新しい形が生まれます。

——同じ県立だからこそ可能な取り組みですね。

恐竜学部はほかの大学には無いものですし、古生物学や地質学を学べる場所も減っていますから、学びたい学生、教える先生が、ここに集結してくるかもしれません。第1次の総合選抜募集では倍率10倍という大変な人気で、大学と兼務の当館の研究者も選考作業を一生懸命頑張っています。ここで学んだ人が、いずれ当館の研究者になってくれたら嬉しいですね。そして、高いレベルで化石を理解するだけでなく、この博物館や福井県の発掘調査にも深い理解をもつ人が増えていくと思っています。

恐竜学部の学生には、当館の運営スタッフや展示解説のアルバイトをしてもらえば、彼らにとっても収入になりますし、博物館の仕事がどういものか知ってもらえます。学生が学んでいる姿も博物館に来た人に見てもらおう予定です。

2000年の開館から現在に至るまで、特にこの



恐竜学部 学部棟外観 (完成予想図)

10年間はアミューズメントと研究の両輪で運営してきましたが、研究についてはトップを走り続ける使命があります。今後もいかに研究を発展させていくか、ちょうど岐路に立っているのかもしれないですね。

——人材を集めて、さらに高い専門性を目指していくわけですね。恐竜研究、生涯学習、地域振興、イメージアップなど、多様な「コト」がこの場所に凝縮され、それを30年以上も続けている。県の運営とはいえ、行財政改革など逆風もあったでしょう、本当に粘り強い取り組みだと感嘆します。

一番の立役者は、栗田幸雄元県知事と東洋^{あづまよういち}※5先生です。「恐竜を東尋坊と永平寺に続く、福井県の3本目の柱にしよう」、その想いと情熱があってこそ生まれた恐竜博物館です。先輩方の努力を無駄にはできません。ようやく「恐竜王国福井」という大きな柱になりつつありますので、気を抜かずに行っていきたいと思います。

——興味本位で恐縮ですが、化石は大変高価なものとなりました。

当館が化石を売ることはありませんが、化石ハンターなどと呼ばれる人がコレクター向けに販売しているようです。以前、ステゴサウルスの全身骨格がオークションに出品されて数十億円で落札されたことがあります。海外の大金持ちなどがコレクションとして買い求めており、そのような中でどうやって質の良い標本を収集していくかもわれわれの課題です。

やはり一番確実なのは自分で掘ることです。当館もほかの研究機関と共同で、国内外で発掘しています。海外での共同研究は、主に中国とタイで行ってきました。中国ではコロナ以降さまざまな事情で発掘ができていませんが、タイでは現在も毎年1カ月間ほど研究員が滞在し発掘を続けています。発見された化石を共同で研究し、そのレプリカを作成し、当館で展示します。国内でも、長崎、

※5 日本の恐竜研究の第一人者、同氏による第1次・第2次調査の学術的成果として県立恐竜博物館が開館した。

徳島、岐阜など、各地で共同研究をしていますが、当館が主導して発掘、研究したとしても、実物は現地で所蔵してもらい、当館は発見された化石のレプリカを展示しています。

ちなみに、この勝山での発掘方法は特徴的で、何十年間も掘り続けられる仕組みになっています。山の中腹から下に地層がある場合、そこを掘り進むと一定のところまで崩れてしまい、それ以上掘り進めることができなくなってしまいますが、福井県では山の表土を全部取り除くという大型の土木工事を行い、特定の地層だけを削っていくため、続けて採掘することが可能となっています。海外と違って、日本の発掘現場は峡谷の崩れたような崖地が多いため、このような方式でないと掘れなくなってしまいます。第4次調査の発掘が終了し、今年は発掘した化石をクリーニングしながら、併行して新しい場所での第5次調査の準備を進めています。来年から表土の除去を始めて、令和8年度から発掘調査に入る予定です。

——次の展開として、何か新しい構想はありますか。

新しい企画としては、「ナイトミュージアム」などを考えています。特殊なライティングで演出する、「魅せる」展示で夜間に営業を行うものです。

実は、2023年12月にナイトミュージアムを試行しました。福井駅からバスでご来館いただき、ナイトミュージアムを楽しんだ後に、当館併設のレストランでクリスマスディナーを食べて福井駅に戻るといったツアーです。チケットは販売開始後すぐに完売しました。大半が県外からの大人のお客さまでしたが、当日は大雪にもかかわらずお一人のキャンセルもありませんでした。昼間見られない限定の展示を見たいという、特別感を求めるお客さまが多かったようです。

ただし、このスケジュールでは勝山市がスルーされてしまうのが問題です。勝山市では冬場のスキーシーズンは多くの観光客で賑わいますが、それ以外の季節の集客が課題となっています。ホテルの稼働率が落ちる春や秋に、ナイトミュージア

ムに訪れたお客さまに宿泊していただければ、地域にもその恩恵を還元できます。ホテルやスキー場の施設と連携しながら、泊まるからこそ体験できる「コト」を増やして提供していきたいと思っています。

まだまだ地元にある地域資源とはしっかりとつながりきれていません。例えば、「食べること」と「学び直すこと」を結び付けるとか、あまり絞り込まず幅広く探していきたいと思っています。

——恐竜研究への熱意が「魅せる」博物館を育み、長きにわたる努力が重なってこそブランド化が実現したのですね。地域活性化に向けて、参考になるお話をたくさん聞かせていただきました。本日はありがとうございました。

